

## ハワイ人の表象

### オセアニアのイメージ

「高貴なる野蛮人 (Noble Savage)」とは、自然と調和して生きる純粋無垢な未開人のことである。未開の人々の中に西洋文明の失った理想的な人間像を求めようとする考え方は古くからあった。近世以降も、16世紀の哲学者モンテーニュ、18世紀の哲学者ルソーなどが、西洋文明に対するアンチテーゼとして、このような「野蛮人」に言及している。18世紀後半のポリネシアもこの「高貴なる野蛮人」というイメージを醸成する舞台となった (Howe 1977)。

探検家のブーガンヴィルは、1769年にフランス人として初めて世界周航に成功したが、彼の出版した『世界周航記』は「ポリネシアの天国」や「高貴なる野蛮人」のイメージを喚起した。これに刺激を受けた百科全書派のデイドロは『ブーガンヴィル航海記補遺』を著し、架空の人物の語りの中で平和な未開人と墮落したヨーロッパ人を対比させて、西洋の文明中心主義を批判した。一方、イギリス人探検家のクックは二度目の航海でタヒチ人の青年オマイを1775年に英国に連れて帰った。オマイはロンドンの社交界において瞬く間に人気者となり、彼を題材とした劇が上演されるほどであった。

このように18世紀の終わりには、ヨーロッパでは「南海の楽園」に住む「高貴なる野蛮人」のイメージが具体的な形を取って浸透していく。米国でも、19世紀半ば、代表作『白鯨』で知られるメルヴィルがマルケサス諸島やタヒチでの体験を元に『タイプー』や『オムー』を発表し、島民を無垢な「高貴なる野蛮人」として描き、楽園ポリネシアのイメージを定着させた。

しかし、全ての西洋人が「高貴なる野蛮人」のイメージを共有していた訳ではない。例えば、キリスト教の宣教師にとって未開人は異教徒であり、改宗させるべき対象であった。そのような未開人が、西洋人よりある意味で優れた「高貴な野蛮人」であっては都合が悪い。宣教師にとって、未開人は異教性を内包した「卑しい野蛮人 (Ignoble Savage)」でなければならなかった。

ところで、オセアニア地域の中でも、ポリネシアとメラネシアでは、西洋人の島民に対して抱くイメージは異なっていた。「南海の楽園」というイメージは、主にポリネシアのものであったと言って良い。メラネシアという名称は島民の肌の黒さに由来しているが、この地域名の由来自体がヨーロッパ人のメラネシア人に対する視線を表している。肌の色が比較的白く、社会が高度に階層化し、外来者に寛容なポリネシア人とそうではないメラネシア人という対比は、文化接触の極めて早い段階から西洋人の中で形成されていた。

### 「致命的な衝撃」

19世紀の中頃より、オセアニアの島々は西洋文明の影響により大きく変貌を遂げる。伝染病、飲酒の習慣、キリスト教、貨幣経済といった、それまで島には存在しなかったものが次々と入ってくることで、島民の人口が減少し、島の社会も激変していった。この島々の急激な文化変容を目の当たりにして新たに形成されたイメージが「滅びゆく野蛮人 (Dying Savage)」である。オセアニアの人々は、高貴だろうが卑しかりょうが、いずれ滅んでしまう人々と見なされるようになったのである。

「滅びゆく野蛮人」のイメージは、島民の人口が増加に転じた20世紀中盤に入っても保持される。このオセアニアの表象を集約したとも言えるのが、1966年にアラン・ムーアヘッドによって著された *The Fatal Impact: The Invasion of the South Pacific 1767-1840* である。1760年代、ブーガンヴィルやクックがオセアニアにやって来た時、島民は原始的ではあるが平穏な生活を営んでいた。しかし、西洋文明の衝撃によって約70年間で「南海の楽園」は失われてしまった。この「致命的な衝撃」のシナリオは、西洋人の島民に対する優越感と罪悪感とノスタルジアといったアンビバレントな感情に支えられたものであった。

### ハワイ人の表象の変遷

誰がどの位置からどのような角度で視線を投げかけるのかによって、立ち現れるオセアニアのイメージは異なってくる。表象する側の視線が変化すれば、表象される側のイメージが変容するのであり、ハワイ人の表象も基本的にはこの文脈で捉えることができる。彼らも当初は“楽園に住む高貴なる野蛮人”であったが、それ以降その表象は変遷していく。このハワイ人表象の変遷について検討した Herman (1999) の研究を紹介しよう。

19世紀の前半、勤勉を旨とするプロテスタントの宣教師にとってハワイ人は「怠惰な未開人」であった。彼らの怠惰な性質は、単なる病気に止まらない道徳的な病であり、勤勉な労働のみがその病を直すことができるとされた。この言説は、白人経営のプランテーションに安価な労働力が必要とされた時代の要請と符合する。

だが、19世紀の後半、中国、ポルトガル、日本から多くの移民が流入すると、「怠惰なハワイ人」という言説は「役に立たないハワイ人」といったものになっていく。新たな労働力を得た白人支配の経済の中で彼らは必要とされなくなったのだ。さらに、王朝転覆からハワイ併合へと向かう19世紀末になると、自らを統治する能力のない「自堕落なハワイ人」といった言説が流通するようになる。それは、白人に対してハワイ人が自分達の主権を奪回しようとした時期であった。

米国の支配下に入ると、新たなハワイ人像が形成された。音楽と花を愛し、無邪気に微笑む「友好的なネイティブ」という表象である。この表象に支えられた「ハワイアン・ホスピタリティ」のイメージは、植民者や移民などの外来者を「招かれた客人」として位置づけ、彼らの支配を正当化するレトリックとして作用した。

Herman (1999) の検証は、混血ハワイ人の言説にも及ぶが、ここでは割愛しよう。1930年代、ハリウッド映画や観光産業において「楽園ハワイ」のイメージが形成されるが、そこに至るまでのハワイ人の表象には長い歴史があった。それは、現在のハワイ人の文化アイデンティティの奥底にも沈殿している。彼らは、そのような歴史に抗して、あるべき自分達の姿を希求している。

### [参考文献]

- Howe, K.R. (1977) The Fate of the 'Savage' in Pacific Historiography. *The New Zealand Journal of History* 11(2): 137-154.  
 Herman, RDK (1999) Coin of the Realm: The Political Economy of "Indolence" in the Hawaiian Islands. *History and Anthropology* 11(2-3): 387-416.